

演題番号 : 7

演題名 : 牛の腎臓頭側にみられた腫瘍

発表者名 : ○沓澤史絵 阿左美有右 安里優子

発表者所属 : 中央食肉衛生検査所

1. はじめに

牛の腎臓周囲に発生する腫瘍には、副腎腫瘍、リンパ腫、他臓器からの転移腫瘍等があるが、当検査所においてはリンパ腫以外に遭遇することは稀である。

今回、腎臓頭側に被膜に覆われた黄褐色腫瘍を認める症例に遭遇したので、その概要を報告する。

2. 材料及び方法

症例は平成 23 年 1 月に当所管内 A 食肉センターへ病畜として搬入された和牛間交雑種、112 ヶ月齢の雄であった。

生体検査では第 10 肋骨後方下腹部に外傷があるものの、他に異常は認められなかった。解体後検査において、右腎臓頭側に腫瘍がみられ、その他には脾うっ血及び肝富脈斑が認められた。

採材した腫瘍を 10% 中性緩衝ホルマリン液で固定後、常法によりパラフィン切片を作製し HE 染色を行った。特殊染色はグリメリウス染色を行った。免疫組織化学染色は抗ヒトビメンチンマウス抗体(ニチレイ社)、抗ヒト S-100 蛋白ウサギ抗体(ニチレイ社)、抗ヒトクロモグラニン A ウサギ抗体(ニチレイ社)、抗ヒトケラチンマウス抗体(ニチレイ社)を使用して行った。

3. 結果

(1) 肉眼所見 : 腫瘍は 20×15×10cm 大で被膜に覆われ、一部右腎臓頭側の被膜と癒着していたが、容易に剥離できた。断面は膨隆、不規則分葉状構造を示し、黄褐色ないし一部暗赤色を呈していた。

(2) 組織所見 : 腫瘍辺縁部は厚く発達した線維性結合組織に覆われ、腫瘍中心部には副腎、リンパ節などの既存構造は確認されなかった。多形性を示す腫瘍細胞が大小血管洞様構造を伴いながらシート状、あるいは立方状に配列して腺様に増殖していた。また、辺縁の一部では小型の細胞が密に増殖している部位もあった。いずれの細胞も異型性や核分裂像に乏しかった。さらに石灰沈着も認められた。特殊染色及び免疫染色の結果は、いずれの細胞もグリメリウス、クロモグラニン A、ケラチンに陰性であったが、ビメンチン及び S-100 蛋白については小型の細胞のみが陽性を示した。

4. 考察及びまとめ

組織像は多彩であったが、随所に副腎由来の腫瘍を疑わせる腫瘍細胞の形態や増殖様式、著明な石灰沈着などが認められた。特殊染色及び免疫染色の結果より副腎髄質腫瘍の可能性は否定され、リンパ腫や他臓器からの転移腫瘍を示唆する所見も認められなかった。またビメンチン、S-100 蛋白に陽性を示した小型の細胞は、副腎皮質細胞への分化が進んだ細胞と思われた。以上のことから、本症例は副腎皮質腫瘍であると考えた。